

窓からみる女性の人生と日蘭の歴史

—鎖国時の丸山遊郭と出島、フェルメールの絵画、飾り窓、働く独身女性用マンションの窓に注目して—

佐藤 未来^{※1}

概要

2023 年にアムステルダム国立美術館で行われた史上最大のフェルメール展覧会^{※2}で観た窓辺の女性が描かれた複数の絵画作品をきっかけに、フェルメールの生きたオランダ黄金時代および大航海時代の貿易先である日本の長崎の丸山遊郭と出島の窓について調査する。また、オランダの繁華街に見られる飾り窓（売春窓）の文化と第二次大戦後に建設され始めた働く独身女性のための集合住宅についても研究し、時代に翻弄されながらも生きる女性の人生について、窓を通して考察していく。

研究背景と目的

筆者は、予ねてより戦時中を生き抜いた女性の人生や、植民地や戦争の歴史のなかで占領や独立という政治的な動きに呼応し、その国の政府が国民および占領下の人々（主婦）に向けて発行した料理本に関するプロジェクトを手掛けてきた。リサーチをベースにした映像インスタレーション作品を制作し、展覧会や映画祭などで発表している。本研究は、制作を計画している窓についての映像インスタレーション作品のために、主にオランダと日本で行った。前述のとおり、2023 年にアムステルダム国立美術館でたくさんのフェルメールの絵画を目の前にできたことは、大学学部時代に油彩絵画を学んだ筆者にとって至福の時間となった。同時にこの作品が、オランダの黄金時代および大航海時代、科学革命が起きたといわれる 17 世紀だと意識してみると別の視点が生まれた。筆者は、オランダがインドネシアやスリナム共和国などを植民地

公益財団法人 窓研究所

にし、現地の人々を奴隷として労働力に使っていた歴史とその食文化のつながりを、フェミニズムの視点を交えて表現した映像作品『Book and Knife』（2021 年）を制作した。この反省すべき占領の歴史は、一方では黄金時代または大航海時代とも呼ばれ、オランダの貿易先であった日本に大きな発展をもたらした。

日本の江戸時代の鎖国時を見てみると、唯一開港していた長崎で、遊女の女性たちがその貿易を支える大きな役割を果たしていたことを知る。筆者自身は港町の横浜出身で、戦後の米兵と横浜の娼婦についての作品『Retelling Yokohama』（2019 年）を制作したこともあり、異邦人を相手にした売春婦の物語に興味を湧いた。また当時オランダ人が住んでいた出島という特殊な場所には、遊女のみが行き来を許されており、彼女たちの主な活動の場は出島か唐人屋敷（中国人専用の住居）であり、吉原などの江戸時代の他の遊廓とは異なっている。

【様式 2】

そして、筆者の現在の拠点の一つであるオランダのアムステルダムという港町には、赤い照明で照らされる窓の売春が合法で存在し、港に近い De Wallen というエリアは一大観光スポットとなっている。売春の歴史は非常に古く、紀元前とも言われ、売春婦は、一説には人類史上最古の職業といわれている。現在の飾り窓と呼ばれる窓を使った見せる売春のスタイルは、戦後 1950～60 年代から始まったとされるが、オランダがインドネシアへ渡る前、近場の欧州間で貿易をしていた 1300 年代にはすでに De Wallen は娼婦で溢れ、航海で疲れた船人たちを癒していたという。

オランダでは、第一次世界大戦ごろまで女性の外で働く職業で、家庭から独立しているものとしては、売春以外にはほとんどなく、多くの女性は専業主婦であり母親業に勤しんでいた。フェミニズムの運動がイギリスから始まり、1900 年代初頭に第一波フェミニズムとして欧州に広がってくるにつれ、女性も高等教育を受け始め、さまざまな職業に就くようになる。それに伴い、独身者も増える。そこで登場したのが、働く独身女性のための集合住宅である。この種のマンションは戦後 1950 年代を中心にオランダのさまざま都市に 12 軒が建てられた。それらは現在、住居者の制限が解除され（働く女性以外でも住めるようになり）、全て現役で使用されており、飾り窓同様に、筆者の生活に身近なものである。その一つには働く独身女性である友人が住んでいるが、住宅難のオランダで単身者や子供のいないカップル用に非常に需要のある住宅となっている。またこの種の集合住宅の建築に当たり、複数の女性建築家が活躍したのも注目すべき点である。

過ごしたフェルメールの描いた窓は、大航海時代における外の世界への憧れであると同時に、観客に開かれた作品世界への入り口とも言える。彼の優れた表現は、窓からの間接的な光によるところが大きい。さらにカメラ・オブスクラを使用していた可能性もあるとされている（実際にフェルメールがカメラ・オブスクラを使用していたことを決定づける証拠はまだないが、高確率で使用していたとされる研究が発表されている）。「暗い部屋」という意味を持ちその部屋の外の風景を部屋の内側へ像として取り入るカメラ・オブスクラ、（家庭の）外部の存在を意味する窓、女性が影に隠れている歴史の流れの中で女性と一緒に内も外も見ていた窓、女性が女性のためにデザインし獲得した自分だけの窓をリサーチし、新作の映像インスタレーションを制作したいと考えている。



『窓辺で手紙を読む女』 1657-1659 年

【様式 2】

※1 東京藝術大学大学院映像研究科博士後期課程 映像メディア学専攻在籍中

※2 2023 年 2 月 10 日～6 月 4 日にアムステルダム国立美術館で開催されたヨハネス・フェルメールの展覧会。現存するとされるフェルメールの作品 37 点のうち、28 点が展示された。

研究成果と考察

ヨハネス・フェルメール（Johannes Vermeer）は、1632 年にデルフト生まれ、1675 年に 43 歳で亡くなるオランダを代表する画家のひとりである。現在確認されている作品は全 37 点であり、その多くは当時の中流階級家庭の室内を描いた風俗画である。その中でも 15 点に窓が、そのうち 13 点は窓辺に女性が描かれている。その室内は、妻カタリーナの裕福な実家の一室、モデルの女性たちは妻や娘、召使などと予想されている。2、3 階建てで木造の骨組みと煉瓦を併用した当時の典型的な煉瓦建築のその窓は、ガラス窓であるが、当時はまだ大判のガラスの製造は難しく、ガラス片が鉛などで繋ぎ合わされたステンドグラスで、裕福な家庭では絵付けを施したものもあった。生涯のほとんどの時間をデルフトで過ごしたフェルメールは、窓を外部／世界の象徴として、または室内の静寂さを際立たせるために描き、窓から注ぐ間接的な光による繊細な描写を特徴とした。17 世紀、望遠鏡と顕微鏡という新たな光学器機と理論、そして肉眼を超える驚異的な観測能力が大きな引き金となって科学革命が起こった。オランダ人の科学者、発明家たちが望遠鏡、顕微鏡、携帯型カメラ・オブスキュラの発明（1645 年に出島に 12 台輸入）をするなかで、画家たちもまた、凸レンズや拡大鏡、カメラ・オブスキュラを用いて自然界を観察し、昆虫や植物の細密画を描き、光と影、そして色彩と色調を捕らえようとした。フェルメールもそのひとりだとされ、室内を

公益財団法人 窓研究所

描くのにカメラ・オブスキュラを使用していたと考えられている。

フェルメールの生きた時代、つまりオランダの黄金時代、大航海時代にオランダ船はインドネシアに拠点をつくり、アジアの貿易を独占した。その貿易先のひとつが日本、長崎港である。先にポルトガルやスペインが来てはキリスト教を布教するので鎖国（1639—1854 年の 210 年間）としたが、オランダと中国が布教しないことを条件に貿易が許された。オランダもキリスト教国だと知った幕府は、出島内のみにオランダ人を住ませ、妻や娘などの女性の来日を一切禁じた。貿易で人々が盛んに賑わう街となり、全国一の人口密度だった長崎の街に、遊女が増え始める。幕府は、風紀の乱れを恐れ、全国に遊廓という合法の売春エリアを設けるよう命じ、長崎には丸山町と寄合町を合わせた丘を丸山遊廓が 1642 年に（1956 年まで 314 年間つづく）誕生する。遊女のほとんどは長崎内から集められ、貧しい家庭の少女が多かった。7、8 歳ごろから遊女屋に売られ、25 歳まで働く。10 両程の身代金（約 100 万円）を背負って商売を始め、小さいことから芸事や読み書き、振る舞いなどを指導され遊女になっていく少女たちは、一般の家庭の女性より恵まれた環境とも見えるが、実際は人身売買であり、貧しい家庭に資金を送るために働かされていた。遊女や遊女となる少女たちは、遊女屋に 30～50 人で共同生活を送っていた。一階が商い、二階が住居の町屋建築の構造の遊女屋は、彼女らの住まいであり仕

【様式 2】

事場でもあった。一階は、出格子や平格子で玄関入り口に暖簾はなく通りと一体につながっていることが多く、二階は明障子、連子である。営業時は、一階に格子に向かってショーウィンドーのように遊女たちが並び、外から男性客が選ぶというシステム。選ばれた遊女は二階で相手をする。丸山遊廓は他の遊廓と違い、夜のみ営業しており、昼間は休養、学習ができ、廓の外の町にも自由に出て家族に会うこともできた。また妊娠した際には、出産も許されていた。1645年ごろから、出島に住むオランダ人が丸山遊廓の遊女を求めるようになる。原則、彼らは出島の外には出ることは禁止されているため、乙名という日本側の使用人に依頼し、遊女に出島に出張させていた。同じく唐人屋敷に集められていた中国人からの依頼にも出張で応えていた。最初は、オランダ人相手、中国人相手の仕事は人気がなく、下等の遊女のみが対応していたが、彼らが遊女に与える贈与品が非常に豊かなことから、太夫も相手をするようになり、遊女の8割が外国人を相手に働くようになる。贈与品は乙名に管理されていたが、きちんと遊女の手元に戻るようにになっており、金銭のほかに砂糖や簪、反物、その他珍しい品々に加え、ラクダ二頭など。遊女たちはもらった品々を転売できるため、それは貿易の一部でもあった。運と実力があれば揚代(遊女や芸者を揚屋に呼んで遊ぶときの代金)だけで年間1000万円を超え、贈与品に至っては一度に数百万円単位で得た。その収入は本人の貯蓄のみならず家族や親戚、出身の地域社会まで潤すことができた。オランダ相手の遊女は、出島に出張に行くが、オランダ人が望んだ場合、手続きを経て、連続して滞在することができた。多くのオランダ人が特定の遊女を連続して呼ぶことが多いが、時には20人を一度に呼び、豪遊することもあった。オランダ人との間に子供

公益財団法人 窓研究所

をもうけ、育てた例も複数あり、親密な関係も生じていたようだ。出島は、約1万5,000㎡の扇形で、東西は約70m、北側は約190m、南側は約233mで商館の他に庭などもあり、オランダ人とインドネシアの召使含め15名程度が滞在していた。他の船の乗組員は船上で過ごしていた。丸山遊廓からは徒歩15分ほどの距離。商館は、日本式建築を基本とした二階建てで、一階は主に倉庫等に使用され、オランダ人は二階を住まいとした。二階には畳の部屋に持ってきた洋家具を使用。窓は窓障子にオランダ製のガラスをはめ込んでおり、当時の日本では非常に珍しい窓であった。丸山の遊女たちはガラス窓の部屋で過ごした最初の日本人女性といえるだろう。手摺子には日本でもオランダでもない植物的な幾何学模様のデザインが施されている。オランダの植民地支配下のインドネシア人、中国人、インド人などの文化が混合したブタウィBetawi文化のデザインと思われる。色も鮮やかな緑が使用され、インドネシアの影響を受けている。遊女たちはオランダ人との意思疎通に苦労していたようだが、太夫クラスとなるとオランダ語も操っていたと考えられている。また彼らの主なコミュニケーション手段は手紙で、通詞(通訳)によって訳されやり取りが行われていた。



『長崎出島館内之図・蘭館内酒宴図』

川原慶賀 1820 年代から 1830 年代長崎の丸山遊廓や出島では日本の遊女がオランダ人を癒していたが、船の出発地オランダ、アムステルダムでは、14 世紀から船人の相手をする娼婦で溢れていた。De Wallen と呼ぶアムステルダムで一番古いエリアは今でも、売春エリアとして栄える。売春は、フランスの占領やキリスト教の影響を受け、合法になったり、違法になったりを繰り返し、売春婦たちは売春宿のオーナー等により違法に雇われている状況が長く続く。まず、売春宿と他の建物を見分けるために赤い照明が使われだし、その後、道での客引きを禁止されたことで、戦後 1950~1960 年代ごろから窓状のドア内に立つ現在のスタイルが確立された。女性たちは下着や水着姿で赤い照明の中でストリートを見つめる。2000 年には、合法化され、完全に独立した個人事業主として売春を行うことができるようになる。21 歳以上の個人事業主で住民登録/市民ナンバーを持ち（つまり滞在ビザを持っている）オランダ語、英語またはスペイン語のどれかの言語で円滑にコミュニケーションが取れる者が、窓を管理する会社に登録することができ、窓を選び日時を予約し、窓およびその奥にある部屋を前払いで契約する。 昼 10-19 時が 90~110€、夜 19-朝 5 時が 200 ~220€ がアムステルダムの相場。ひとり 15 分程度〜ふたり以上の相手で儲けが出る料金設定が多いが、料金やサービス内容などは、全て個人が決めることができる。平均 5 年ほど娼婦として働き、他の仕事に映ることが多いそう。飾り窓は、現在オランダの・アムステルダム、アルクマール、ハーグ、デーフェンター、ドゥーティンヘム、アイントホーフェン、フローニンゲン、ハールレム、レーワルデン、ネイメーヘンにあり、ベルギー、ドイツでも見ることができる。この窓を使った見せる売春は、消費される公益財団法人 窓研究所

身体と守られる身体、女性を選ぶ側の視点または客（男性）を選ぶ側の視点、そしてパブリックとプライベートの境界に窓があり、窓を開けたその狭間で料金やサービスを自由に客と交渉をするというスリリングな体験である。その窓は非常に人通りが多い道にあるので、周りの通行人からの視線もある。交渉が成立すれば窓はカーテンが引かれ、奥の部屋に案内されることとなる。アムステルダムの飾り窓の建物は、16、17 世紀の典型的なカナルハウスである。そのほとんどが市のモニュメントに指定されている。飾り窓が連立しているところもあるが、多くは一般のカフェやレストラン、お土産店、または一般の住居など隣り合っている。De Wallen は、徒歩 15 分程で歩けるほどの広さで、アムステルダム中央駅から 10 分の立地。現在は、約 200 窓があり約 350 人ほどのセックスワーカーが働いているとみられる。2007 年にプロジェクト 1012(De Wallen の郵便番号にちなんだ名前)が施行され、De Wallen を「清掃」していく政策が始まっている。このエリアは最も栄えている観光地だが、そこには住民もいるため、苦情が相次いでいる。飾り窓に加え、大麻販売店（合法）や酒場も多いため、観光客が賑やかになりやすい。オーバーツーリズムに対処するため、いろいろな禁止事項を発表した。「都会のジャングル」から「モニュメントガーデン」への変貌を遂げようとしているようだ。このエリアでは、路上などのパブリックゾーンでは大麻を吸うこと、飲酒がすでに禁止された。さらには、飾り窓を全て撤去する計画を立てている。アムステルダム市政は、売春が違法ドラッグやマフィアなどの関係と繋がっていて危険、また違法な人身売買がおこなわれていることを理由にして。実際このような危険度の高いことが発生するのはかなり稀であり、合法化以降、自立し、主体

【様式 2】

性を持ったセックスワーカーが働いているのが現状である。市は、売春自体は無くないものと考え、「エロティックセンター」という名のビルを南部に建築する予定としている。このセンターには、異性だけでなく同性またはクィアなセックスワーカーを集め、ストリップ劇場や様々なアイテムなどを販売する店などを収容する予定だという。そのデザインは市内の建築事務所 Moke Architecten がモデルを作成済みだが、オープンなコンペティションは一切行われず、セックスワーカーたちの声は全く反映されていない。まだ詳しいデザインはわからないが、パブリックな路上にあったものが、ビルの中に収納されてしまうのは、危険だというセックスワーカーも多い。薬物やマフィアとオン繋がりもより多くなってしまう可能性さえ懸念されている。またロケーションは、南部にあるエキスポなどを行う展示会場のあるエリアでビジネスマンが多い。しかし、僻地ではないものの、周りに主要な観光名所はなく、わざわざ出かけていく必要があり、気軽な利用は難しいと考えられる。オランダの民主主義の社会では、多くのセックスワーカーが反対している現状、この計画が決行されるとしても、かなりの時間を要すると予想される。しかし、このエリアを「清掃」したいと考える試みもあり、De Wallen エリアの歩行者の歩行方向を指定し整理する提案もある。現在は縦横無尽に人が行き来しているが、一方通行のエリアを作るなどし、制御する試みである。Failed Architecture という建築と空間批評のためのプラットフォームが実験的に地図を作成した。飾り窓は、客が路上からセックスワーカーを行ったり来たりして選び、交渉に立ち止まるため、好ましくないと考えられる。De Wallen には、非営利団体 PIC Prostitution Information Center (売春情報センター) が、1994 年に公益財団法人 窓研究所

元セックスワーカーのマリスカ・マヨール (Mariska Majoor) 氏によって設立された。PIC の主な目的と活動は、情報提供と教育。セックスワークに関する正確な情報を、セックスワーカー、顧客、学生、ジャーナリスト、観光客など、関心を持つすべての人々に提供する。センター内では、関連書籍の閲覧、質問への対応に応じてもらえる。また、セックスワーカーの権利を守り、社会的な尊重を促進するための活動を行っている。セックスワーカーの社会的状況を改善するための新しい法律の導入にも取り組む。さらに筆者も参加したガイドツアーを主催し、参加者に地域の歴史やセックスワークに関する理解を深めてもらうことを目的としている。



アムステルダムの飾り窓

江戸時代の日本の遊女屋のシステムは 15 世紀後半に経営者が男性に変わると、遊女の主体性はなくなってしまうが、実は 9 世紀後半に初めて日本で遊女が出現した際は、「遊行女婦」あるいは「娘子」などと呼ばれ、歌を歌うことが仕事だった。中世になると遊女集団は母から子へと継続されるによ系的な「家」となり、遊女は独立した自営業者・経営者として職業組合をけ結成していた。当時の遊女は主体的、自立的に生きていたとされる。近世以降は、遊女屋は男性社会そのものとなり、いかに男性の性的欲望を満たすかという男性の目線の運営

【様式 2】

となった。性の売買に疑似恋愛要素を取り入れ、没頭させるため、そして遊女を搾取し続ける遊廓のシステムができあがったとされる。

1900 年代の第一波フェミニズムの影響で、オランダにも徐々に男女が平等に教育を受け、社会に出て働きたいという女性の需要が高まる。戦争による労働者不足もあり、娼婦以外の社会で働く女性が徐々に現れてきた。彼女たちは自分の玄関とキッチン、独立して生活できるプライバシーの守られた空間を所望していた。結果的に、オランダの復興期といわれる 1940-1965 年の間にオランダの各都市に計 12 の働く独身女性のための集合住宅が建築されるが、オランダ人女性建築家のパイオニアであるマーガレット・スター＝クロプホルダー Margaret Stall-Kropholler (1891-1966) とライデン生まれのウィルヘルミナ・コルネリア・マリア・ヤンセン Wilhelmina Cornelia Maria Jansen (1904-1989) は、かなり早い時期から働く独身女性のための集合住宅について考案していた。M. Stall-Kropholler は 1919 年にそのアイデアを思いつき、1937 年には設計している。また W. C. M. Jansen も 1938 年にすでに計画に参加していた。しかし、戦争の影響で資金や資源の不足で計画はなかなか順調に進まなかった。彼女らを含み計 4 人の女性建築家が 5 つのプロジェクトで設計を担当した。1950 年代までの独身女性とは、30 歳以上で一度も結婚したことのない女性のことを指す。オランダは 19 世紀後半に工業化したが、これは他のヨーロッパ諸国より遅い。またオランダの教会では家族生活が強く推奨されており、女性の家庭外労働は不道德とみなされていたこともあり、独身女性用住宅に関しては、他の欧州の国々より遅れをとった。オランダの最初の働く女性用集合住宅は、公益財団法人 窓研究所

1941-1942 年に建てられたアムステルダム の Oranjehof で Joop Pot と Koos Pot-Keegstra の男女の夫婦によって設計。その後、ライデン、ヒルバーサム、デン・ハーグ、ロッテルダム、ユトレヒト、バッサムの都市で、働く女性用集合住宅が建てられていった。女性建築家による設計は、Oranjehof と同じ夫婦がデン・ハーグに、M. Stall-Kropholler はアムステルダムに、W. C. M. Jansen がロッテルダムに、

Helene Hulst-Alexander がユトレヒトにそれぞれデザインした。本研究では、1956-1958 年に W. C. M. Jansen がロッテルダムに建てた RVS flat に注目する。他のオランダの地と異なり、ロッテルダムはドイツ、ナチによる空爆で焼け野原となった。また W. C. M. Jansen は当時もっとも多く的女性団体に所属していた建築家であり、女性の住まいについて、労働について努力した活動家でもある。戦前は、独身者は既婚者より多く税金を払わされており（独身税）、独身者は住宅を探すための協会に登録することさえできなかった。そのため、独身女性は結婚するまで実家に留まるか他なく、ほとんど行き場がない状態。戦争が終わり世界的なフェミニズムの盛り上がりでオランダ国内の女性運動団体の活発化によって、徐々に変化が見えてきた。

1940 年 5 月 14 日のロッテルダム市中心部の爆撃とそれに続く大火災により、推定 850 人の命が奪われた。爆撃からわずか 4 日後の 1940 年 5 月 18 日、市議会は都市建築家ウィレム・ゲリット・ヴィッテフェーン Willem Gerrit Witteveen (1891-1979) を任命し、全く新しい市街地の計画を策定させ、瓦礫の撤去と復興計画の策定が直ちに開始された。この信じられないほど素早い動きには、ナチがロッテルダムに侵略してくる危険性があったからだと言われている。

【様式 2】

W. C. M. Jansen は、この厳しい状況と政府が家族の住宅を優先するなか、ロッテルダムの投資及び保険会社 RVS の出資で、ついに働く独身女性のための集合住宅をデザインする機会を得た。当時、彼女は無名の建築家であったが、RVS 社がロッテルダムの建築事務所 Kuiper, Gouwetor & De Ranitz と協力して、彼女に設計の依頼。彼女の設計は、ファンクショナリズム Functionalism (機能主義)、つまり、建築物のデザインは、その機能や使用目的に基づき、装飾より実用性・機能性を優先し、合理性・効率性・構造の明快さを重視するだという考え方をベースに設計をされた。実際に住人に内部を案内していただくと、リビングには日光が十分に入る方角に大きく開放的な窓、日当たりの悪い部分にはキッチンが設置されており、実に住み心地の良さそうな部屋である。シャワールームやコート掛けにも細部に機能性が宿る。玄関のドア横には、忙しい働く女性用に、今で言うところの「置き配達」ができるボックスと、ゴミ箱をロープで地上まで下ろせるような仕組みがついていた。10 階建て 160 戸の部屋があり、一階には小売店が二つ、その他倉庫などがある。3 部屋のある家が 100 室、2 部屋の家が 40 室、1 部屋の家が 20 室あり、3 部屋の家には独身女性が二人でシェアすること、または不完全な家族、高齢のカップルの居住が求められた。初めは、40 歳以上の働く独身女性を対象にしていたが、30 歳まで下げられ、不完全な過去族や高齢者も対象となった。実際に住民を募集すると、働く独身女性だけで 160 戸では収まらない数の応募があり、需要の高さが伺えた。住人となったのは 9 割以上がオランダ人働く独身女性となった。入居には面接が科されるなど、人格や品方も試され、市議や RVS 社の知り合いは有利とされていた。現在も RVS flat は美しく健在で、

公益財団法人 窓研究所

働く独身女性以外にも男性独身者や学生、子供のいない夫婦やシングルマザーなどさまざまな種類の人々が住んでいる。

働く独身女性向けの住宅建設に際し、1950 年頃女性運動団体と自治体がどのような部屋が求められているか、複数回アンケートを行った。女性運動団体と自治体の予想に反し、女性たちは女性だけが住民の集合住宅は望んでいなかった。彼女たちは男性や家族連れなどが混じった住宅を希望しており、交流を望んでいた。立地は中心地すぎない、便利な場所で手頃な賃料を希望。立地はほとんどが希望に添えていたが、賃料は高く低所得者向けに計画されていても完成すると高い賃料が必要になるケースが多数。当時の男女不平等な給料の状況下では恵まれた家庭の女性にしか手が届かない状況であった。セクシャリティの多が進むオランダだが、住宅事情の性差による不平等さを払拭したのは意外にも遅れていたことがわかる。計画通りにはいかない部分も多くあったが、女性の主体性が担保されるべき未来の社会において大きな一歩であったことに変わりはない。



RVS flat の現在の外観と内装